

紅玉

泉鏡花

青空文庫

時。

現代、初冬。

場所。

府下郊外の原野。

人物。

画工。侍女。（烏の仮装したる）

貴夫人。老紳士。少紳士。小児五人。

——別に、三羽の烏。（侍女と同じ扮装）

小児一 やあ、^{ステーション}停車場の方の、遠くの方から、あんなものが遣^やつて来たぜ。

小児二 何だい何だい。

小児三 ああ、^{おおき}大なものを背負^{しよ}つて、^{よろよろ}蹣跚々々来るねえ。

小児四 影法師まで、ぶらぶらしているよ。

小児五 重いんだろうか。

小児一 何だ、引越かなあ。

小児二 構うもんか、何だつて。

小児三 御覧よ、^{せな}脊^{せな}よりか高い、障子見たようなものを背負^{しよ}つて
るから、^{たこ}風^{ある}が歩行^{ある}いて来るようだ。

小児四 糸をつけて揚げる真似まね工してやろう。

小児五 遣れ遣れ、おもしろい。

凧を持ったのは凧を上げ、独楽こまを持ちたるは独楽を廻す。手にもものなき一人いちにん、一方に向い、凧の糸を手繰る真似して笑う。

画工 (枰張わくばりのまま、絹地の画えを、やけに紐ひもからげにして、薄汚れたる背広の背に負い、初冬はつふゆ、枯野の夕日影にて、あかあかと且つ寂さみしき顔。酔える足どりにて登場) ……落第々々、大落第。(ぶらつく体を杖ステッキに突掛つくる状さま、疲切きりつたる樵夫のごとし。しばらくして、叫ぶ) 畜生、状さまを見やがれ。

声に驚き、且つ活いける玩具おもちゃの、手許てもとに近づきたるを見て、

糸を手繰りたる小児こども、衝つと開いて素知らぬ顔す。

画工、その事には心付かず、立停たちどまりて嬉戯きぎする小児等こどもらを
す。

よく遊んでるな、ああ、羨うらやましい。どうだ。皆みんな、面白いか。

小児等、彼の様子を見て忍しのびわらい笑す。中に、糸を手繰りたる
一人いちにん。

小児三 ああ、面白かったの。

画工 くだ（管をまく口吻くちふり）何、面白かった。面白かったは不可いかん

な。今の若さに。……小児こどもをつかまえて、今の若さも変だ。

（笑う）はははは、面白かったは心細い。過去った事のようにで
情なさけない。面白いと云え、面白がれ、面白がれ。なおその上に面

白くなれ。むむ、どうだ。

小児三　だつて、兄さん怒るだろう。

画工　（解し得ず）俺おれが怒る、何を……何を俺が怒るんだ。生命いのち

がけで、描かいて文部省の展覧会で、平へつくばつて、可いいか、洋

服の膝を膨らまして膝行いざつてな、いい図じゃないぜ、審査所の

お玄関で頓とんしゅ首再拜つかまつと仕つた奴を、紙鉄砲で、ポンと撥ねはられ

て、ぎやふんとまいった。それでさえ怒り得ないで、悄すこすこ々と

杖つえに縋すがつて背負しよつて帰る男じゃないか。景気よく馬肉けとばしで呷あおつ

た酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい処へ、

げっそり空腹すきばらと来て、蕎麦そばともいかない。停車場前ステーションで饅飩うどん

で飲んだ、臓府ぞうふがさながら蚯蚓みみずのような、しッこしのない江えんどツ

戸児こまがい擬が、どうして腹なんぞ立て得るものかい。ふん、だらし

やない。

他の小児こどもはきよろきよろ見ている。

小児三　何だか知らないけれどね、今、向うから来る兄さんに、糸目をつけて手繰っていたんだぜ。

画工　何だ、糸を着けて……手繰ったか。いや、怒りやしない。何の真似だい。

小児一　兄さんがね、そうやってね、ぶらぶら来た処がね。

小児二　遠くから、まるでもって、風の形に見えたんだもの。

画工　ははあ、風か。（背負ってる絵を見る）むむ、そこで、

（仕形しかたしつつ）とやって面白がっていたんだな。処で、俺がこ

う近くに來たから、怒られやしないかと思つて、その悪戯いたずらを止やめたんだ。だから、面白かつたと云うのか。……かつたは寂さみしい、つまらない。壮さかんに面白がれ、もつと面白がれ。さあ、糸を手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、凧になつて、上あがつてやろう。上つて、高い空から、上野の展覽会を見てやる。京、大阪を見よう。日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの兒こ來て煽あおれ、それ、お前は向うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。（笑う）ははは、面白い。

小兒等しばらく遼しゅんじゅん巡す。画工の機嫌よげなるを見るより、一人は、画工の背せなかを抱いだいて、凧を煽る真似す。一人は駈かけ出して距離を取る。その一いちにん人。

小児三 やあ、大風だい、一人じや重い。

小児四 うん、手伝つてやら。（と独樂を懷にして、立並ぶ）――

――風吹け、や、吹け。山の風吹いて来い。――（同音に囃す。^{はや}）

画工 （あおりたる児の手を離ると同時に、大手を開いて）こ
うなりや風絵だ、提灯屋^{ちようちんや}だ。そりや、しやくるぞ、水汲^くむぞ、

べつかつこだ。

小児等^{こどもら}の糸を引いて駈^{かけ}るがままに、ふらふらと舞台を飛廻り、
やがて、樹根^{きのね}に^{どう}となりて、切なき呼吸^{いき}つく。

暮色到る。

小児三 風は切れちやつた。

小児一 暗くなつた。――ちようど可い。

小児二　また、……あの事をしよう。

その他　遣ろうよ、遣ろうよ。――（一同、手はつながず、少しずつ間をおき、ぐるりと輪になりて唄う。）

青山、葉山、羽黒の権ごんげん現さん

あとさき言わずに、中はくぼんだ、おかまの神さん

唄いつつ、廻りつつ、繰り返す。

画工　（茫然ぼうぜんとして黙想したるが、吐息して立つてこれを視ながむ。
）おい、おい、それは何の唄だ。

小児一　ああ、何の唄だか知らないけれどね、こうやって唄っている、誰か一人踊出すんだよ。

画工　踊る？　誰が踊る。

小児二 誰が踊るって、このね、環わの中へ入って踞しゃがんでるものが踊るんだって。

画工 誰も、入ってはおらんじやないか。

小児三 でもね、氣味が悪いんだもの。

画工 氣味が悪いと？

小児四 ああ、あの、それがね、踊ろうと思って踊るんじゃないんだよ。ひとりでにね、踊るの。踊るまいと思つても。だもの、氣味が悪いんだ。

画工 遣つてみよう、俺を入れる。

一同 やあ、兄さん、入るかい。

画工 俺が入る、待て、（画を取つて大樹の幹によせかく）さあ、

可いか。

小児三 目を塞いでいるんだぜ。

画工 可、この世間を、酔つて踊りや本望だ。

青山、葉山、羽黒の権現さん

小児等唄いながら画工の身の周囲を廻る。環の脈を打つて伸

び且つ縮むに連れて、画工、ほとんど、無意識なるがごとく、

片手また片足を異様に動かす。唄う声、いよいよ冴えて、次

第に暗くなる。

時に、樹の蔭より、顔黒く、嘴黒く、烏の頭して真黒なる

マント様の衣を裾まで被りたる異体のもの一個顕れ出で、小

児と小児の間に交りて斉しく廻る。

地に踞^{うづくま}りたる画工、この時、中腰に身を起して、半身を左右に振つて踊る真似す。

続いて、初の黒^{はじめ}きものと同じ姿したる三個、人の形の鳥。樹

蔭より顕れ、同じく小児等の間に交つて、画工の周囲を繞^{めぐ}る。

小児等は絶えず唄う。いづれもその怪^{あやし}き物の姿を見ざる趣な

り。あとの三羽の鳥出でて輪に加わる頃より、画工全く立上

り、我を忘れたる状^{さま}して踊^いり出す。初手の鳥もともに、就^な

中^{ずく}、後^{あと}なる三羽の鳥は、足も地に着かざるまで跳^ち梁^{やうり}す。

彼等の踊狂う時、小児等は唄^{とど}を留む。

一同（手に手に石を二ツ取り、カチカチと打鳴らして）魔が来た、でんでん。影がさいた、もんもん。（四五度口々に寂^{さみ}しく

囃^{はや}す）ほんとに來た。そりや來た。

小兒のうちに一人^{いちにん}、誰とも知らずかく叫ぶとともに、ばらばらと、左右に分れて逃げ入る。

木^この葉落つ。

木の葉落つる中に、一人^{いちにん}の画工と四個の黒き姿と頻^{しきり}に踊る。

画工は靴を穿^はいたり、後の三羽の烏皆爪^{つま}まで黒し。初^{はじめ}の烏ひとり、裾をこぼるる^{つまぐれない}褻^{つまくれない}紅に、足白し。

画工（疲果てたる状^{さま}、どう^{どう}と仰様^{のけさま}に倒る）水だ、水をくれい。

いずれも踊り留^やむ。後の烏三羽、身を開いて一方に翼を交わしたるごとく、腕を組合せつつ立ちて視^{なが}む。

初の烏（うら若き女の声にて）寝たよ。まあ……だらしのない

事。人間、こうはなりたくないものだわね。——そのうちに目が覚めたら行くだろう——別にお座敷の邪魔にもなるまいから。……どれ、（樹の蔭に一むら生茂りたる薄の中より、組立てに交叉したる三脚の竹を取出して据え、次に、その上の円きこうさ板を置き、卓子テエブルのごとくす。）

後の鳥、この時、三羽とも無言にて近づき、手伝う状にて、二脚のズツク製、おなじ組立ての床几しょうぎを卓子の差向いに置く。
く。

はじめ初の鳥、また、旅行用手提げの中より、葡萄酒ぶどうしゅの瓶を取出だし卓子の上に置く。後の鳥等、青き酒、赤き酒の瓶、続いてコップを取出だして並べ揃う。

やがて、初の鳥、一挺ちようの蠟燭ろうそくを取つて、これに火を点ず。

舞台あかる明くなる。

初の鳥（思ていい着きたる体にて、一ツの瓶の酒を玉ぎよくさん盞つに酌つぎ、
燭しよくに翳かざす。）おお、綺麗きれいだ。燭あかりが映つて、透徹すきとおつて、いつか
の、あの時、夕日の色に輝いて、ちようど東の空に立つた虹にじの、
その虹の目のようだと云つて、薄雲に翳かざして御覧なすつた、奥
様の白い手の細い指には重そうな、指環ゆびわの球たまに似てること。

三羽の鳥、打傾うたかへいて聞きつつあり。

ああ、玉が溶けたと思う酒を飲んだら、どんな味がするだろう
ねえ。（鳥の頭かしらを頂きたる、咽喉のどの黒き布をあけて、少わき女の
面おもてを顕あらわし、酒を飲まんとしためらて猶予う。）あれ、ここは私には口

だけれど、鳥にするとちようど咽喉だ。可厭いやだよ。咽喉だと血が流れるようですねえ。こんな事をしているんだから、気になるよそう。まあ、独ひとりごと言を云つて、誰かと話をしているようだよ……

(四辺あたりをみまわす) そうそう、思った同士、人前で内証で心を通わす時は、一ツに向つた卓テエブル子が、人知れず、脚を上げたり下げたりする、幽かすかな、しかし脈を打つて、血の通う、その符牒ふちようで、黙あいずつていて、暗号が出来る、いつも奥様がおつしやるもんだから、——卓子さん(卓をたたく)殊にお前さんは三ツ脚で、狐狗狸こつくりさん、そのままだもの。活いきてるも同じだと思ふから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うっかりして、少々大事な

事を饒舌しゃべつたんだから、お前さん聞いたばかりにしておいてお

くれ。誰にも言つては不可いけないよ。ちよいと、注ついだ酒をどう

しよう。ああ、いい事がある。（酔倒あふれたる画工あつに近づく。後あと

の鳥一ツ、同じく近寄りて、画工うなの項なを抱いだいて仰向あおむけにす。）

酔よばらいさん、さあ、冷水おひや。

画工（飲みながら、現うつにて）ああ、日が出た、が、俺やみは暗夜だ。

（そのまま寝返る。）

初の鳥 日が出たつて——赤い酒から、私のこの鳥を透かして、

まあ。——画えに描えいた太陽おひさまの夢を見たんだろう。何だか謎の

ような事を言つてゐるわね。——さあさあ、お寢室ねまごしらえをし

ておきましよう。（もとに立戻すりて、また薄すすきの中より、このた

びは一領の天幕^{テント}を引出し、卓子^{テーブル}を蔽^{おお}うて建廻す。三羽の鳥、

左右よりこれを手伝う。天幕の裡^{うち}は、見ぶつ席より見えざるあ

つらえ。お樂^{たのし}みだわね。(天幕を背後^{うしろ}にして正面に立つ。三

羽の鳥、その両方に^{たらず}ゐむ。)

もう、すっかり日が暮れた。(時に、はじめてフト自分の他^{ほか}に、

鳥の姿ありて立てるに心付く。されどおのが目を怪^{あやし}む風情。少

しずつ、あちこち歩^{ある}行く。歩行くに連れて、鳥の形動き絡^{まと}うを

見て、次第に疑^{うたがい}惑を増し、手を挙げれば、鳥等も同じく挙げ、

袖を振動かせば、齊^{ひと}しく振動かし、足を爪立つれば爪立ち、踞^{しゃが}

めば踞むを透^{すか}し視^{なが}めて、今はしも激しく恐怖し、慌^{あわただ}しく駈^{かけ}出す

。

帽子を目深に、オーバーコートの鼠色なるを被、太き洋杖ステッキを持てる老紳士、憂鬱ゆううつなる重き態度にて登場。

はじめ 初の鳥ハタと行当る。驚いて身を開く。紳士その袖を捉とらう。

初の鳥、遁のがれんとして威おどす真似して、かあかあ、と鳥の声をなす。泣くがごとき女の声なり。

紳士 こりや、地獄の門を背負しよつて、空を飛ぶ真似をするか。

（掴つかひしぐがごとくにして突離す。初の鳥、と地どうに座ざす。三

羽の鳥はわざとらしく吃きつきよう驚の身振みぶりをなす。）地を這はう鳥は、

鳴く声が違うじやろう。うむ、どうじや。地を這う鳥は何と鳴くか。

初の鳥 御免なさいまし、どうぞ、御免なさいまし。

紳士 ははあ、御免なさいましと鳴くか。（繰返して）御免なさい

いましと鳴くじやな。

初はつの鳥 はい。

紳士 うむ、（重うなずく頷く）聞えた。とにかく、汝きさまの声は聞えた。

——こりや、俺の声が分るか。

初はつの鳥 ええ。

紳士 俺の声が分るかと云うんじや。こりや。面つらを上げろ。——

どうだ。

初はつの鳥 御前ごぜんさま様、あれ……

紳士 （杖ステッキをもつて、その裾すそを圧おさう）ばさばさ騒さわぐな。槍やりで脇腹

を突つかれる外ほかに、樹の上へ得え上る身体からだでもないに、羽はばたきを

するな、女郎、手を支いて、静として口をきけ。

初の鳥 真まことに申訳のございました、飛んだ失礼をいたしました。

……先達せんだつて、奥様がお好みのお催しで、お邸やしきに園遊会の仮装

がございました時、私わたくしがいたしました、あの、このこしらえが、

余りよく似合ったと、皆様がそうおっしゃいましたものでございますから、つい、心得違いな事をはじめました。あの……後

で、御前様が御旅行を遊ばしましたお留守中は、お邸にも御用が少うございますものですから、自分の買もの、用達ようたしだの、

何のと申して、奥様にお暇を頂いては、こんな処へ出て参りまして、偶たまに通りますものを驚かしますのが面白くてなりませんので、つい、あの、癖になりました、今晚も……旦那様に申訳

のございました。失礼をいたしました。どうぞ、御免遊ばして下さいまし。

紳士 言う事はそれだけか。

初はつの鳥 はい？（聞返す。）

紳士 俺に云う事は、それだけか、女郎めろう。

初はつの鳥 ああの、（口籠くちごもる）今夜はどういたしました事でござい

ますか、私わたくしの形なり……ああの、影法師が、この、野中のちやみの宵闇よやみに判はつつきり

然しかと見えますのでございませう。それさえ気味が悪うございま

すのに、氣をつけて見ますと、二つも三つも、私わたくしと一所いしょに動き

ますのでございませう。

三方たたずに分れてゐゐむ、三羽さんの鳥、また打うち領なづく。

もう可^{おそろし}恐くなりまして、夢中で駈出しましたものですから、御前様に、つい——あの、そして……御前様は、いつ御旅行さきから。

紳士 俺の旅行か。ふふん。（自ら嘲^{あざ}ける口^{くちぶり}吻^{きさま}）汝^{きさま}たちは、俺が旅行をしたと思うか。

初の烏 はい、一昨日から、北海道の方へ。

紳士 俺の北海道は、すぐに俺の邸の周圍じゃ。

初の烏 はあ、（驚く。）

紳士 俺の旅行は、冥^{めいど}土の旅のごときものじゃ。昔から、事が、こういう事が起つて、それが破滅に近づく時は、誰もするわ。

平凡な手段じゃ。通例過ぎる遣^{やりかた}方^{かた}じゃが、せんという事には

行^ゆかなかつた。今云うた冥土の旅を、可^い厭^やじやと思つても、誰
もしないわけには行^ゆかぬようなものじや。また、汝^{きさま}等^らとても、
こういう事件の最後の際には、その家の主人か、良人^{おとこ}か、可^え
か、俺^{おれ}がじや、ある手段として旅行するに極^{きま}つとる事を知つて
おる。汝^{きさま}は知^りらいでも、怜^り惻^{そう}なあれは知^りつておる。汝^{きさま}とても、
少しは分^わつておろう。分^わつていて、その主人が旅行^{りょこう}という隙^{すき}間^ま
を狙^ねう。わざと安心して大胆^{ふらち}な不埒^{ふち}を働^{はたら}く。うむ、耳^{みみ}を蔽^{おほ}うて
鐸^{たつ}を盗^{すず}むというのじや。いずれ音^{おと}の立ち、声^{こゑ}の響^{ひび}くのは覚^さ悟^ごじ
やろう。何もかも隠^{かく}さずに言^いつてしまえ。いつの事か。一体、
いつ頃の事か。これ。

侍女 　いつ頃とおっしゃって、あの、影法師の事でございましょ

うか。それは唯^{ただいま}今……

紳士 黙れ。影法師か何か知らんが、汝^{きさま}等三人の黒い心が、形にあらわれて、俺の邸の内外を横行しはじめた時だ。

侍女 御免遊ばして、御前様^{わたくし}、私は何にも存じません。

紳士 用意は出来とる。女郎^{めろう}、俺の衣兜^{かかし}には短銃^{ピストル}があるぞ。

侍女 ええ。

紳士 さあ、言え。

侍女 御前様、お許し下さいまし。春の、暮^{くれ}方の事でござい
す。美しい虹^{にじ}が立ちまして、盛りの藤の花と、つつじと一所に、
お庭の池に影の映りましたのが、薄紫^{かしら}の頭で、胸に炎^{から}の掬^かみま
した、真紅^{しんく}なつつじの羽^{まじ}の交った、その虹の尾を曳^ひきました大

きな鳥が、お二階を覗のぞいておりますように見えたのでござい
ます。その日は、御前様のお留守、奥様が欄干越に、その景色を
お視ながめなさいまして、——ああ、綺麗な、この白い雲と、蒼あおぞ
空らの中に漲みなぎった大鳥を御覧——お傍そばに居おりました私わたくしにそうお
つしやいまして——この鳥は、頭かしらは私の簪かんざしに、尾を私の帯にな
るために来たんだよ。角の九つある、竜が、頭かしらを兜かぶとに、尾を草く
摺さすりに敷いて、敵に向う大將軍を飾ったように。……けれども、
虹には目がないから、私の姿が見つからないので、頭かしらを水に浸
して、うなだれ悄しおれている。どれ、目を遣やろう——と仰おつしや有い
ますと、右の中指に嵌はめておいで遊ばした、指環ゆびわの紅あかい玉でござ
います。開いては虹に見えぬし、伏せては奥様の目に見えま

せん。ですから、その指環をお抜きなさいまして。

紳士 うむ、指環を抜いてだな。うむ、指環を抜いて。

侍女 そして、雪のようなお手の指を環わに遊ばして、高い処で、

青葉の上で、虹の膚はだへ嵌めるようになさいますと、その指に空

の色が透通りまして、紅い玉は、颯さつと夕日に映って、まったく

虹の瞳になつて、そして晃々きらきらと輝きました。その時でござい

ます。お庭も池も、真暗まっくらになつたと思います。虹も消えまし

た。黒いものが、ぱつと来て、目潰めつぶしを打ちますように、翼を

拡げたと思いますと、その指環を、奥様の手から攫さらいまして、

鳥が飛びましたのでございます。露に光る木この実だ、と紅い玉

を、間違えたのでございましょう。築山の松こすえの梢を飛びまして、

遠くも参りませんで、塀の上に、この、野の末の処へ入ります。
真赤な、まん円な、大きな太陽様の前に黒く留まったのが見え
たのでございます。私は跣足で庭へ駈下りました。駈けつけて
声を出しますと、鳥はそのまま塀の外へまた飛びましたのでご
ざいます。ちようどそこが、裏木戸の処でございます。あの木
戸は、私が御奉公申しましてから、五年と申しますもの、お開
け遊ばした事といつては一度もなかったのでございます。

紳士 うむ、あれは開けるべき木戸ではないのじゃ。俺が覚えて
からも、止むを得ん凶事で二度だけは開けんければならんじゃ
った。が、それとても凶事を追出いたばかりじゃ。外から入っ
て来た不祥はなかつた。——それがその時、汝の手で開いた

のか。

侍女 ええ、錠じょうの鍵かぎは、がっちりささっておりましてけれど、赤あ

錆かさび

に錆切りまして、圧おしますと開きました。くされて落ちた

のでございます。塀の外に、散歩らしいのが一人立っていたの

でございます。その男が、烏くちばしの嘴くちばしから落しました奥様のその指

環てのひらを、掌てのひらに載せまして、凝じつと見ていましたのでございます。

紳士 餓鬼がっきめ、其奴そいつか。

侍女 ええ。

紳士 相手は其奴じやな。

侍女 あの、私わたくしがわけを言つて、その指環を返しますように申し

ますと、串じょうだん戯ぎらしく、いや、これは、人間の手を放れたも

の、鳥の嘴から受取ったのだから返されない。もつとも、鳥に
ならば、何時なんどきなりとも返して上げよう——とそう申して笑う
んでございます。それでも、どうしても返しません。そして——
確たしかに預る、決して迂散うさんなものでない——と云つて、ちゃんと、
衣兜かぶとから名刺を出してくれました。奥様は、面白いね——とお
つしやいました。それから日を極きめました、同じ暮方の頃、そ
の男を木戸の外まで呼びましたのでございます。その間に、こ
の、あの、鳥の装束をお誂あつちえ遊ばしました。そして私わたくしがそれを
着て出まして、指環を受取りますつもりなのでございましたが、
なぶつてやろう、とおつしやつて、奥様が御自分に鳥の装束を
おめし遊ばして、塀の外へ——でも、ひよつと、野原に遊んで

いる小児^{こども}などが怪しい姿を見て、騒いで悪いというお心付きから、四阿^{あずまや}へお呼び入れになりました。

紳士 奴は、あの木戸から入ったな。あの、木戸から。

侍女 男が吃驚^{びっくり}するのを御覧、と私^{わたくし}にお囁^{ささや}きなさいました。奥様

が、烏は脚では受取らない、とおつしやつて、男が掌^{てのひら}にのせました指環を、ここをお開きなさいまして、（咽喉^{のど}のあく処を示す）口でおくわえ遊ばしたのでございます。

紳士 口でな、もうその時から。毒蛇め。上^{うわ}頤^{あご}下^{した}頤^{あご}へ拳^{こぶし}を引掛^{つか}け、透通^{べに}る齒と紅さいた唇を、めりめりと引裂く、売女^{ばいた}。

（足を挙げて、枯草^{ふみにじ}を踏蹂^{ふみにじ}る。）

画工 ううむ、（二声ばかり、夢に魘^{うな}されたるもののごとし。）

紳士 (はじめて心付く) 女郎、こつちへ来い。(杖をもつて一

方を指す。)

侍女 (震えながら) はい。

紳士 頭かしらを着けろ、被かぶれ。俺の前を鳥のように躍ゆって行け、——
飛べ。邸を横行する黒いものの形かたを確しかと見覚えておかねばなら
ん。躍はなれ。衣兜かくしには短銃ピストルがあるぞ。

侍女、鳥のごとくその黒き袖を動かす。おののき震うと同じ
状さまなり。紳士、あとに続いて入る。

三羽の鳥 (声を揃えて叫ぶ) おいらのせいじゃないぞ。

一の鳥 (笑う) ははははは、そこで何と言おう。

二の鳥 しょう事はあるまい。やっぱり、あとは、鳥のせいだと

言わねばなるまい。

三の鳥　すると、人間のした事を、俺たちが引被るのだな。

二の鳥　かぶろうとも、背負おうとも。かぶった処で、背負った処で、人間のした事は、人間同士が勝手に夥間うちで帳面づらを合せて行く、勘定の遣り取りする。俺たちが構う事は少しもない。

三の鳥　成程な、罪も報も人間同士が背負いつこ、被りつこをするわけだ。一体、このたびの事の発源は、そこな、お一どのが悪戯からはじまった次第だが、さて、こうなれば高い処で見物で事が済む。嘴を引傾げて、ことんことんと案じてみれば、われらは、これ、余り性の善い夥間でないな。

一の鳥 いや、悪い事は少しもない。人間から言わせれば、善い
 とも悪いとも言おうがまだ。俺はただ屋の棟で、例の夕飯ゆうめし
 を稼いでいたのだ。処で艶麗あでやかな、奥方とか、それ、人間界で
 言うものが、虹の目だ、虹の目だ、と云うものをくちばし（嘴を指す）
 この黒い、鼻の先へひけらかした。この節、肉どころか、血ど
 ころか、贅ぜいたく沢きりんな目玉などはついに賞しょうがん翫ためしした験がない。鳳ほう
 凰うおうの髓ずい、麒麟きりんの鰓えらさえ、世にも稀な珍味と聞く。虹の目玉だ、
 やあ、八千年生延びろ、と逆落さかおとしの廂ひさしのはずれ、鶉ひよどり越ごえを
 遣ったがよ、生命いのちがけの仕事と思え。鳶とびなら油あぶら揚あげも攫さらおう
 が、人間の手に持ったままを引手ひつたぐ繰る段は、お互に得手でない。
 首尾よく、かちりと銜くわえてな、スポンと中庭を抜けたは可よかつ

たが、虹の目玉と云う件くだんの代しろものはどうだ、齒も立たぬ。や、堅そうろういの候うの。先祖以来、田螺たにしを突つつくに練きたえた口も、さて、がつくりと参まゐつたわ。お底かげで舌の根が弛ゆるんだ。癩しやくだがよ、振放すつとして素飛すつとばいたまでの事だ。な、それが源もとで、人間が何をしようと、かをしようと、さつぱり俺が知しつた事ではあるまい。

二の鳥 道理かな、説法かな。お釈迦しやかさま様より間違まちがいのない事を云うわ。いや、またお一どのの指環を銜くはえたのが悪ければ、晴上はがつた雨も悪し、ほかほかとした陽氣も悪し、虹も悪い、と云わねばならぬ。雨や陽氣がよくないからとて、どうするものだ。得えての、空の美しい虹の立つ時は、地にも綺麗な花が咲くよ。芍薬しやくやくか、牡丹ぼたんか、菊か、猿えてが折みつて蓑みのにさす、お花畑

のそれでなし不思議な花よ。名も知れぬ花よ。ざっと虹のよう
な花よ。人間の家の^{やうち}中に、そうした花の咲くのは壁にうどんげ
の開くとおなじだ。俺たちが見れば、薄暗い人間界に、^{まぶし}眩い虹
のような、その花のパツと咲いた処は^{あざやか}鮮麗だ。な、家を忘れ、
身を忘れ、^{いのち}生命を忘れて咲く怪しい花ほど、美しい眺望^{ながめ}はない。
分けて今度の花は、お一どのが蒔^まいた^{あか}紅い玉から咲いたもの、
吉野紙の霞で包んで、露をかためた硝子^{ビイドロ}の器の中へ密^{そつ}と蔵^{しま}つ
てもおこうものを。人間の黒い手は、これを見るが最後^{つか}掴み散
らす。当人は、黄色い手袋、白い腕飾と思うそうだ。お互に見
れば真^ま黒^{くろ}よ。人間が見て、俺たちを黒いと云うと同一^{おなじ}かい、
別して今来た親^{おやじ}仁などは、鉄棒同然、腕に、火の舌を^{から}掬めて吹

いて、右の不思議な花を微塵^{みじん}にしようと苛^{あせ}つておるわ。野暮^{やぼ}めがな。はて、見ていれば綺麗なもの、仇^{あだ}花なりとも美しく咲かしておけば可^いい事よ。

三の鳥 なぞとな、お二^{ふた}めが、体^{てい}の可^い事を吐^ぬす癖に、朝鳥の、朝桜、朝露の、朝風で、朝飯を急ぐ和郎^{わろ}だ。何だ、仇花なりとも、美しく咲かしておけば可^いい事だ。からからからと笑わせるな。お互にここに何している。その虹の散るのを待つて、やがて食おう、突こう、嘗^なみよう、しゃぶろうと、毎夜、毎夜、この間、……咽喉^{のどくちばし}、嘴^{くちばし}を、カチカチと囓^{かみ}鳴らいておるのでないかい。

二の鳥 さればこそ待つている。桜の枝を踏めばといって、虫の

数ほど花片はなびらも露もこぼさぬ俺たちだ。このたびの不思議なそ
 の大輪の虹の台うてな、紅玉の蕊しべに咲いた花にも、俺たちが、何と、
 手を着けるか。雛芥子ひなげしが散つて実になるまで、風が誘うを視ながめ
 ているのだ。色には、恋には、情には、その咲く花の二人を除の
 けて、他の人間はたいがい風だ。中にも、ぬしというものはな、
 主人あるじというものはな、淵ふちに棲すむぬし、峰あるじにすむ主人と同じで、
 これが暴風雨あらしよ、旋風つむじかぜだ。一溜ひとたまりもなく吹散らす。ああ、
 無慙むざんな。

一の鳥くちばしと云ふ嘴を、こつこつ鳴らいて、内々その吹き散るのを
 待つのは誰だ。

二の鳥 ははははは、俺達だ、ははははは。まず口だけは体ていの可い

い事を言うて、その実はお互に餌食えじきを待つのだ。また、この花は、紅玉の蕊しべから虹に咲いたものだが、散る時は、肉になり、血になり、五色ごしきの腸はらわたとなる。やがて見ろ、脂の乗った鮫鰯あんこうのひも、という珍味を、つるりだ。

三の鳥 一つの事だ、ああ、聞いただけでも堪たまらぬわ。（ばたばたと羽を煽あおつ。）

二の鳥 急ぐな、どっち道俺たちのものだ。餌食がその柔かな白々とした手足を解いて、木の根の塗膳ぬりぜん、錦手にしきでの木の葉の小皿盛となるまでは、精々、咲いた花の首尾を守護して、夢中に躍跳たのしねるまで、楽たのしませておかねばならん。網で捕とつたと、釣くろしつたのでは、鯛たいの味が違ちがうと言わぬか。あれ等を苦くるしませてはなら

ぬ、^{かなし}悲ませてはならぬ、海の水を酒にして泳がせろ。

一の鳥　むむ、そこで、^{いす}椅子やら、^{テエブル}卓子やら、^{テント}天幕の上げさげまで手伝うかい。

三の鳥　あれほどのものを、（天幕を指す）持運びから、始末まで、俺たちが、この黒い翼で人間の目から^{おお}蔽うて手伝うとは悟り得ず、^{すすき}薄の中に隠したつもり、^{あいつら}彼奴等の甘さが^{たま}堪らん。が、俺たちの為す^な処は、退いて見ると、^{によほう}如法これ下女下男の所為^{しよい}だ。天が^{あめ}下に何と鳥ともあろうものが、大分権式を落すわけだな。

二の鳥　獅子、^{しし}虎、^{とら}豹、^{ひよう}地を走る獣。空を飛ぶ仲間では、^{わし}鷺、^{たか}鷹、^{きりよう}みさごぐらいなものか、餌食を掴んで容色の^{いい}可いのは。……

熊なんぞが、あの形で、椎の実を拝んだ形な。鶴とは申せど、
 尻を振つて泥^{どじよう}鰯^{おつかけ}を追懸る容体などは、余り喝采^{やんや}とは参らぬ
 図だ。誰も誰も、食^{くら}うためには、品も威も下げると思え。さま
 でにして、手に入れる餌食だ。突^つくとなれば会釈はない。骨ま
 でしゃぶるわ。餌食^{むざん}の無慙^{むざん}さ、いや、またその骨^{ソツ}の肉汁^{うま}の旨^{うま}さ
 はよ。(身震いする。)

一の鳥 (聞く半ばより、じろじろと酔臥^{よいふ}したる画工を見ており)
 おふた、お二どの。

二の鳥 あい。

三の鳥 あい、と吐^{ぬか}す、魔ものめが、ふてぶてしい。

二の鳥 望みとあらば、可愛い、とも鳴くわ。

一の鳥 いや、串じょうだん戲おは措け。俺は先刻さつきから思う事だ、待設け

の珍味も可いいが、ここに目の前に転がった餌食はどうだ。

三の鳥 その事よ、血の酒に酔う前に、腹へ底を入れておく相談にはなるまいかな。何分にも空腹だ。

二の鳥 御同然に夜食前よ。俺も一先いっさきに心付いてはいるが、その人間はまだ食頃くいごろにはならぬと思う。念のために、面つらを見ろ。

三羽の鳥、ばさばさと寄り、頭こうべを、手を、足を、ふんふんとかぐ。

一の鳥 堪たまらぬ香においだ。

三の鳥 ああ、旨うまそうな。

二の鳥 いや、まだそうはなるまいか。この齒をくいしばった処

を見い。総じて寝ていても口を結んだ奴は、蓋ふたをした貝だと思え。うかつに嘴はしを入れると最後、大事な舌を挟まれる。やがて意地汚いじきたなの野良犬が来て舐めよう。這奴しやつよつあし四足めに瀬踏せづみをさせて、可よいとなって、その後で取蒐とりかかろう。食ものが、悪いかして。脂のない人間だ。

一の鳥 この際、乾ひものでも構わぬよ。

二の鳥 生命いのちがけで乾ものを食って、一分いちぶんが立つと思うか、高たかまきえ
蒔絵かまきえのお肴ととを待て。

三の鳥 や、待つといえ、例の通り、ほんのりと薰かほって来た。

一の鳥 おお、人臭いぞ。そりや、女のおいだ。

二の鳥 はて、下司げすな奴、同じ事を不思議な花が薰かほると言え。

三の鳥 おお、蘭奢待らんじやたい、蘭奢待。

一の鳥 鈴ヶ森でも、この薰かおりは、百年目に二三度だったな。

二の鳥 化鳥ばけどりが、古い事を云う。

三の鳥 なぞと少わかい気でおると見える、はははは。

一の鳥 いや、こうして暗やみで笑った処は、我ながら無気味だな。

三の鳥 人が聞いたら何と言おう。

二の鳥 鳴からすなきだ、と吐ぬかすやつよ。

一の鳥 何も知らずか。

三の鳥 不便ふびんな奴等。

二の鳥 (手を取合うて) おお、見える、見える。それ侍女こしもとの

気で迎えてやれ。（みずから天幕テントの中より、燭ともしたる蠟燭ろうそくを

取出だし、野中に黒く立ちて、高く手に翳かざす。一の鳥、三の鳥

は、二の鳥の裾すそに踞しゃがむ。）

薄すすきの彼方あなた、舞台深く、天幕の奥斜めに、男女なんによの姿立たちあらわ顕

る。一は少紳士いっわかき、一は貴夫人、容姿美しく輝くばかり。

二の鳥 恋も風、無常も風、情なさけも露、生命いのちも露、別るも薄すすき、招

くも薄、泣くも虫、歌うも虫、跡は野原だ、勝手になれ。（怪

しき声しゆにて呪す。一と三の鳥、同時ひざまずに跪いて天を拝す。風一陣、

灯ともしび消ゆ。舞台一時暗黒。）

はじめ、月なし、この時薄月出づ。舞台明あかるくなりて、貴夫人

も少紳士わかきも、三羽の鳥も皆見えす。天幕あるのみ。

画工、猛然として覺さむ。

魘おそわれたるごとく四辺あたりをみまわし、慌あわただしく画えの包をひらく、衣か

兜くしのマツチを探り、枯草に火を点ず。

野火やか、炎々。絹地に三羽の鳥あらわる。

凝視。

彼処かしこに敵あるがごとく、腕を挙げて睥睨へいげいす。

画工 俺の画を見る。——待て、しかし、絵か、それとも實際の
奴等か。

——幕——

大正二（一九一三）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紅玉

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>